

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

| | |
|--|---|
| 論文提出者氏名 | 鹿野 祐嗣 |
| 論文題目 | ドゥルーズの『意味の論理学』の注釈と研究——出来事、運命愛、そして永久革命—— |
| <p>審査要旨</p> <p>本論文はジル・ドゥルーズ(1925-1995)の重要著作の一つである『意味の論理学』(1969)についての個別研究である。『意味の論理学』は同時期の『差異と反復』(1968)と較べると、その特異な形式と内容のため、あまり研究が進んでこなかった。『意味の論理学』は34の「セリー」と呼ばれる断片と5つの付属論文から構成されているが、本論文は各セリーに散りばめられた素材やテーマを再構成して体系化し、ばらばらでは見えなかったドゥルーズ哲学の一貫性を描きだすことに成功している。『意味の論理学』では、ルイス・キャロル、ストア派、分析哲学、フロイト・クライン・ラカンらの精神分析、構造主義、ロマンの数理哲学、シモンドン等々の多種多様な対象が論じられるが、本論文はその対象の一つ一つについて、ドゥルーズが参照しているテキストや資料に丹念に当たりながら、ドゥルーズが元になる素材をどのようにしてみずからの哲学に取り込んでいったかを検証し、素材との比較検討を通してドゥルーズの思考の独自性を明らかにしている。研究手法としては地道な注釈作業の積み重ねであるが、解釈者の主観や思い込みをできるかぎり排し、ひたすら文言と論理とを忠実に追跡していくことによって、安易な解釈を許さないドゥルーズのテキストがもつ比類のない一貫性と強靭さを浮き彫りにしている。</p> <p>本論文が明らかにしようとするドゥルーズ哲学の本質とは、宇宙や世界の存在論的な永久革命性の主張にある。ニーチェの「永遠回帰」を「差異の永遠回帰」として理解するドゥルーズは、この〈永遠回帰＝永久革命〉の運動構造を、物理、生物、心理、社会、記号(言語)や論理の各層に見ており、それを「存在の一義性」(多や差異について言われる一義性)として肯定しようとしているとされる。その意味でドゥルーズの哲学は「存在論的アナーキズム」という性格をもつが、さらに重要なことは、『意味の論理学』は存在のもつアナーキーな本質を主張するだけにとどまらず、存在のアナーキーなポテンシャルからどのようにして具体的な個物や個体が「発生」(制度化)してくるかを記述している点である。ドゥルーズはこの「発生学」を、第一次領域(物質的カオス状態)、第二次組織(形而上学＝メタ物質的な超越論的次元)、第三次整序(経験的次元)という三層に腑分けして記述しており、世界はそれら三層の絶えざる循環運動によって成立すると考えるのである。先行研究においては、この三層それぞれの特徴とそれらの関係性が正確に扱われておらず(三層構造になっているということさえ理解されていなかったりする)、その結果、ドゥルーズのその後の著作やガタリとの共著(たとえば『アンチ・オイディプス』(1972)や『千のプラトー』(1980))の諸概念を密輸入して『意味の論理学』を強引に読むという事態が横行している。しかし、本論文が明らかにしたところによれば、ドゥルーズの著作は、たとえ同じ概念、同じ語彙を用いていたとしても、その定義や意味は著作ごとによりかなり違いがあり、ある著作の概念によって他の著作の同じ概念を理解してはならない。実はドゥルーズの作品は個別の作品ごとに、個性あるいは個的体系性が強いということ、このことを『意味の論理学』という実例を通して明らかにしたことも、本論文の大きな貢献である。そして『意味の論理学』の価値は、『差異と反復』では十分に描かれなかった、この三層構造にもとづく発生のプロセスを描いた点にある。それこそが「深層」(「第一次領域＝物質」あるいは「第三次整序＝経験」と「表層」(「第二次組織＝超越論的なもの・形而上学的なもの」との循環(これもまた永遠回帰の運動)という問いの真の在処であるとされる。</p> <p>ドゥルーズ研究への本論文の貢献は、『意味の論理学』における特にストア派と精神分析の重要性を明らかにした点にある。この両者との関係も、従来その重要性は指摘されながらも、等閑にされていた問題である。まずストア派との関係では、ストア派の存在概念をドゥルーズはドゥンス・スコトゥスの「存在の一義性」やニーチェの「永遠回帰」の思想に結びつけ、世界の根底に蠢く、形象化も対象化も理論化もできない「無定形な力」と理解しつつ、そうした荒ぶる力を認め、それと折り合いをつける「賢人」思想をストア派の中に見る。しかしそうした</p> | |

ドゥルーズのストア理解はすでにストア派を超えており、ドゥルーズはストア派の賢人思想を存在論的な「革命」思想に読み替えていることが指摘される。本論文によれば、ドゥルーズは、伝統的には観想的だった「賢人」あるいは「隠遁者」の思考を「革命家」の思考へと作り変えており、そこにドゥルーズ哲学の独自性がある。こうしたドゥルーズ独自のストア派解釈は先行研究ではほとんど看過されてきたところであり、それをドゥルーズが援用している膨大なフランスのストア学研究の資料を丹念に参照しながら明らかにした点は、古典哲学に精通した審査員たちからも高い評価を受けた。そしてドゥルーズと精神分析との関係について論じる箇所は、本論文の白眉とも言うべき部分である。精神分析との関係についての従来の研究は、ガタリとの出会い以後の精神分析批判を『意味の論理学』にも読み込んでしまうものが大多数であるが、本論文は、『意味の論理学』には精神分析を真っ向から批判する箇所は少なく、むしろ精神分析を「非人称性」と「構造」の思考として、すなわち伝統的な意識主義や人間主義を乗り越える思考として高く評価していると指摘する。特に構造主義に目配りをしながらも、「構造」というものを不変的なものではなく、人間が完全には意識化できない、絶えず変動する運動体として理解するという、きわめて独創的な読み替えをドゥルーズが行っており、それが精神分析の評価と繋がっている点を明らかにした。フロイトは言うに及ばず、とりわけクラインとラカンの思想を、ドゥルーズがどのように解釈し、自らの哲学に独創的な仕方を取り込んだかについての記述は、その精神分析理解の正確さや論証の明晰さが素晴らしく、精神分析を専門とする審査員たちから絶賛された。特に「妄想分裂ポジション」「抑うつポジション」「性ポジション」を存在論的三層構造と重ね合わせるドゥルーズ独特の解釈の意義が緻密に分析され、フロイトの男性中心のでもクラインの女性中心のでもない、性差を超えた精神分析的な存在論の可能性をドゥルーズが探っていたという指摘は鋭い。この可能性はガタリと出会った『アンチ・オイディプス』以降消滅するが、むしろそこにこそ、ドゥルーズ哲学全体における『意味の論理学』の独自性、「飛び地」としての可能性を見ることができるといえる。さらに単にドゥルーズの精神分析解釈を注釈するにとどまらず、精神分析という、「人間」の意識/無意識に立脚した理論を援用することは、「非人称の哲学」というドゥルーズ思想の全体的傾向と齟齬をきたすのではないかと問題提起もなされ、その観点から、晩年のドゥルーズ自身による『意味の論理学』への否定的評価についての分析も大変興味深いものであった。この点については、『意味の論理学』はドゥルーズ存在論の「人間学版」なのかという問いが審査員から出され、その評価について先端的かつ発展的な議論が行われた。

論文の問題点としては、ドゥルーズが最終的なゴールになっており、もう少しドゥルーズに距離を取り、ドゥルーズを超える視点が欲しいという点、議論が明快・鮮やかすぎて、ドゥルーズが内包している揺れやブレが（指摘されてはいるものの）抹消されている点、ドゥルーズ存在論の政治性が主張されているが、その時の「政治性」の定義が曖昧な点、などが挙げられた。とはいえ、これらは申請者本人も十分に認識し、論文の中でも触れていることであり、いささかも論文の評価を下げるものではない。本論文は一〇〇万字（四〇〇字詰原稿用紙で二五〇〇枚相当）という分量もさることながら、その内容・質においても課程博士論文としては傑出しており、二名のドゥルーズ研究の専門家からも、世界的に見ても稀有な、ドゥルーズ研究の新次元を切り拓くもの、今後のドゥルーズ研究にとって不可欠の参照軸、等々の最高の評価を受けた。以上から、本論文は早稲田大学の博士（文学）の学位を授けるにふさわしいものであることを、ここに報告する次第である。

| 公開審査会開催日 | 2017年3月10日 | | | |
|----------|--------------------|-------|-------------------|--------------------|
| 審査委員資格 | 所属機関名称・資格 | 氏名 | 専門分野 | 博士学位名称 |
| 主任審査委員 | 早稲田大学文学学術院・教授 | 藤本 一勇 | フランス現代思想 | |
| 審査委員 | 早稲田大学文学学術院・教授 | 村井 翔 | 精神分析・20世紀オーストリア文学 | |
| 審査委員 | 東京大学大学院人文社会研究科・准教授 | 鈴木 泉 | フランス現代思想・近世哲学 | |
| 審査委員 | 京都大学人文科学研究所・准教授 | 立木 康介 | 精神分析 | 博士(精神分析) パリ第8大学 |
| 審査委員 | 立教大学大学院現代心理学研究科・教授 | 江川 隆男 | フランス現代思想 | 博士(文学) 東京都立大学 |

